16　天界の中の四方位

一四一　天界に世のような四方位、東・南・西・北があり、どちらの世界もその太陽により、天界では主である天界の太陽により、世では世の太陽により決定されています。

それでも多くの相違が間に存在します。

最初に、世では太陽が地の上方で最も高い位置にあるそこが南、地の下方で反対側のそこが北、昼夜平分時に太陽が昇るそこが東、その時に太陽が沈むそこが西と呼ばれます――このように世では南により全方位が決定されます。

けれども天界では、太陽としての主の見られるそこが東、反対側に西、天界で〔自分の〕右側が南、またそこの左側が北です。またこのことは彼らの顔と身体を回転させてもすべてそうなっています。このように天界では東により全方位が決定されます。

太陽としての主が見られる場所が東と言われる理由は、すべてのものの**いのちの起源**は太陽としてのその方からであるからです。また、天使がその方からの熱と光または愛と知性を受け入れれば受け入れるほど、それだけ主は彼らのもとに**昇る**と言われます――ここからもまた、主はみことばの中で東と言われています。[*1]

一四二　第二の相違は、天使にとって常に、正面が東、背後が西、右側が南、左側が北であることです。しかし、このことは世では理解されることがほとんどできません。その理由は、人間はすべての方位に自分の顔を向けるからであり、それで、説明しなくてはなりません。

全天界はそれ自体を、その共通の中心へ向かうかのように主へ向けています。ここから、すべての天使は自分自身をそこへ向けています――共通の中心へすべてのものが向かうことは地球上でもまた知られています。しかし、天界での方向は世の方向と異なり、天界では前面がその共通の中心へ向けられます、しかし世では下の部分が向けられます。世での方向づけは、求心力また重力とも呼ばれるものです――さらにまた、天使の内的なものは実際に正面に向かっています。内的なものは顔の中に現われるので、それで、顔が方位を決定するものです。[*2]

一四三　しかし、**天使が顔と身体をどれほど方向転換しても**、天使の目の前に東があることは、世ではほとんど理解されません。その理由は、人間には方向転換にしたがって目の前にすべての方位があるからであり、それで、このこともまた説明する必要があります。

天使は人間と同様に自分の顔と自分の身体をあらゆる方向へ向け、曲げますが、それでも常に彼らに目の前に東があります。しかし、天使の方向転換は人間の方向転換のようではありません、その起源が異なるからです。確かに同じに見えますが、それでも同じではありません。支配愛がその方向転換の起源であるから

＊1　主は天界の太陽であられるので、最高の意味で東であり、それは常に昇っていて、決して沈まない（一〇一、五〇九七、九六六八番）。

＊2　天界の中のすべての者は自分自身を主へ向ける（九八二八、一〇一三〇、一〇一八九、一〇四二〇番）。それでも、天使が自分自身を主へ向けるのではなく、主が彼らをご自分へ向けられる（一〇一八九番）。主のもとに天使が現在するのではなく、天使のもとに主が現在される（九四一五番）。

です。そこから天使と霊のもとにすべての方向が決定します。なぜなら、直前に言われたように、彼らの内的なものは実際にその共通の中心へ、したがって天界では太陽としての主へ向けられ、それゆえ、愛の対象が常に彼らの内的なものの前にあり、顔は彼らの外なる形であって、内的なものからその外なる顔が存在するようになるので、それで、顔の前には常にその支配愛があることになります。そこで、天界の中では、それは太陽としての主です。彼らの愛の対象はその方であり、彼らの愛はその方からのものであるからです。[*3] 主ご自身が天使のもとのご自分の愛の中におられるので、それゆえ、天使がどのように身体を向けても、主が〔天使に〕ご自分を眺めるようにされるのです。

これらのことをこれ以上にわかりやすく説明することはできませんが、しかしこのあとの章の中で、特に「表象するものと外観について」、それと「天界の中での時間と空間について」扱っているところで、〔読者の〕理解力にさらにはっきりと示します。

天使の顔の前には変わらずに主があること、このことは多くの経験から私に知ることが、そしてまた知覚することが与えられました。私は天使と交わっているたびごとに、私の顔の前に主が現在されることに気づき、たとえその方が見えなくても、光の中で知覚したからです。このようであることを、天使もまたたびたび証言しました。

主は変わらずに天使の顔の前におられるので、それゆえ、世でもまた、「目や顔の前に神がおられる。その方を眺める。その方を信じて、愛する者は、その方を見る」と言います。人間がこのように話すのは霊界からです、なぜなら、人間の話し方の中には霊界からの多くのものがあるからです。それでも、人間は霊界からであることを知りません。

一四四 このような主へ向かう方向転換があることは、天界の驚くべきことの一つです。なぜなら、多くの者がそこの一つの場所にいて、互いにどれほど顔と身体を別々に方向転換していても、それでもすべての者が自分自身の前に主を見るからであり、それぞれの者にとって自分の右に南、左に北、背後に西があるからです。

さらにまた驚くべきことは、たとえすべての天使の視線が東に向かっていても、それでもやはり彼らが残りの三つの方位を見ていることです。しかし、その三つの方位を見ることは、思考のものである彼らの内的な視覚からです。

さらにまた驚くべきことですが、天界の中では、他の者の後ろに立ち、彼の後頭部を眺めることは決して許されません、その時、主からのものである善と真理の流入が乱されます。

一四五 天使が主を見るのと、主が天使を見られるのとでは見方が異なっています――天使は主を目を通して見ます、けれども、主は天使を額で見られます。額で見られる理由は、額は愛に対応するからであり、主は愛を通して彼らの意志の中に流入し、目に対応する理解力を通して、ご自分を見られるようにされます。[*4]

＊3 霊界のすべての者は、自分の愛するものへ絶えず自分自身を向けており、そこの方位は顔から始まり、決定される(一〇一三〇、一〇一八九、一〇四二〇、一〇七〇二番)。
顔は内的なものに対応して形作られている(四七九一～四八〇五、五六九五番)。
ここから内的なものは顔から輝き出る(三五二七、四〇六六、四七九六番)。
顔は天使のもとで内的なものと一つになっている(四七九六、四七九七、四七九九、五六九五、八二四九番)。
内的なものが顔とその筋肉の中へ流入することについて(三六三一、四八〇〇番)。

一四六　しかし、主の天的な王国を構成する者の天界の中の方位は、霊的な王国を構成する天界の中の方位と異なっています。その理由は、主は天的な王国の中の天使に太陽として見られますが、霊的な王国の中の天使に月として見られ、主が見られるところが東であるからです。

そこの太陽と月の隔たりは三十度であり――ここから方位も同様です。

天界が天的な王国と霊的な王国と呼ばれる二つの王国に分かれていることは、その章に見られます(**二〇～二八**番)――また主が天的な王国の中で太陽として、霊的な王国の中で月として見られることも示しました(**一一八**番)――それでも、天界の方位がこのことによって区別がつかなくなることはありません。霊的な天使は天的な天使のところへ上ることはできず、後者も前者のところへ下ることはできないからです(前の**三五**番参照)。

一四七　ここから、主が天界の中でどのように現在されるか明らかです。(前の**一二**番で言われたように)どこにでもおられ、その方から発出する善と真理の中にいるそれぞれの者のもとに、その結果、天使のもとのご自分のものの中におられるのです。

主が現在されることを、天使は内的なものの中で知覚します。それらから目で、そのようにその方を自分自身の外に見ます、〔視覚は知覚の〕連続であるからです。

ここから〔次の〕主のことばにしたがって、主が彼らの中におられ、彼らが主の中にいることは、どのように理解されなければならないか明らかにすることができます、

わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中に〔とどまります〕(ヨハネ一五・四)。

わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちに〔とどまります〕(ヨハネ六・五六)。

主の「肉」は神的善を、「血」は神的真理を意味します。*5

一四八　天界の中のすべての者は方位にしたがって分かれて住みます。愛の善の中にいる者は東と西に住み、その愛の善を明らかに知覚する者は東に、不明瞭に知覚する者は西に住みます。愛の善からの知恵の中にいる者は南と北に住み、明らかな知恵の光の中にいる者は南に、不明瞭な知恵の光の中にいる者は北に住みます。

---

*4　額は天界の愛に対応する。それゆえ、みことばの中の「額」によってその愛が意味される(九九三六番)。理解力は内なる視覚であるので、目は理解力に対応する(二七〇一、四四一〇、四五二六、九〇五一、一〇五六九番)。それゆえ、「目を上げること」や「見ること」は、理解すること、知覚すること、認めることを意味する(二七八九、二八二九、三一九八、三二〇二、四〇八三、四〇八六、四三三九、五六八四番)。

*5　みことばの中の「主の肉」は、その方の神的人間性を、またその方の愛の神的善を意味する(三八一三、七八五〇、九一二七、一〇二八三番)。

また「主の血」は、神的真理と信仰の聖なるものを意味する(四七三五、六九七八、七三一七、七三二六、七八四六、七八五〇、七八七七、九一二七、九三九三、一〇〇二六、一〇〇三三、一〇一五二、一〇二一〇番)。

主の霊的な王国にいる天使も、主の天的な王国の者と同様に住んでいますが、それでも愛の善とその善からの真理にしたがって相違があります。なぜなら、天的な王国の中の愛は、主への愛であり、ここから真理の光は知恵ですが、霊的な王国の中の愛は、仁愛と呼ばれる隣人に対する愛であり、ここから真理の光は信仰とも呼ばれる知性であるからです(前の**二三**番参照)――さらにまた方位に関しても相違しています、なぜなら、方位は、すぐ前に言われたように(**一四六**番)、二つの王国の間で三十度離れているからです。

一四九　天使は、天界のそれぞれの社会の中の自分たちの間でも同様の方位にしたがって住んでいます。そこの東には愛と仁愛の程度の大きいものの中にいる者が、西にはその程度の小さいものの中にいる者が、南には知恵と知性の大きい光の中にいる者が、北には小さいものの中にいる者が住んでいます。

このように分かれて住むのは、それぞれの社会は天界を表わし、最小の形の天界でもあるからです(前の**五一**～**五八**番参照)――彼らの集会の中でも同様です。

彼らは天界の形からこの秩序の中に導かれ、天界の形からそれぞれの者が自分自身の場所を知っています。

さらにまた天界は形に関してどこでもその天界自体に似ているという理由から、主により、それぞれの社会の中にすべての種類の者がいるように備えられています――それでも、全天界の配置は、共通のものが個別のものと異なるように、各社会の配置とは異なります。なぜなら、東方の社会は西方の社会よりも、また南方の社会は北方の社会よりもすぐれているからです。

一五〇　この結果として、天界の中の方位はそこに住んでいる者のもとにあるようなものを意味します。

すなわち、東は明らかな知覚の中にある愛を、西は不明瞭な知覚の中にある愛を、南は明らかな光の中にある知恵と知性を、北は不明瞭な光の中にある知恵と知性を意味することです。

このようなことが方位によって意味されるので、それゆえ、それらによって、みことばの内意で、すなわち、霊的な意味で同様なものが意味されます。[*6] なぜなら、みことばの内意は、すなわち、霊的な意味は完全に天界の中にあるものにしたがっているからです。

一五一　地獄の中にいる者には正反対です。

そこにいる者は、太陽としての、または月としての主に目を向けないで、主に後ろを向け、世の太陽の代わりにそこにある暗黒へ、また地球の月の代わりにそこにある暗やみへ目を向けます。世の太陽の代わりにそこにある暗黒へ目を向ける者は悪鬼と呼ばれ、地球の月の代わりにそこにある暗やみへ目を向ける者は〔悪〕霊と呼ばれます[*7]――世の太陽と地球の月は霊界の中では見られないで、天界の太陽と反対の位置に世の太陽の代わりに暗黒が、また天界の月と反対の位置に地球の月の代わりに暗やみが見られることは前に示しました(**一二二**番)――ここから、彼らにとって方位は天界の方位と反対です。彼らに暗黒と暗やみのある

＊6　みことばの中で「東」は明らかな知覚の中の愛を意味し(一二五〇、三七〇八番)――「西」は不明瞭な知覚の中の愛(三七〇八、九六五三番)――「南」は光のまたは知恵と知性の状態(一四五八、三七〇八、五六七二番)――「北」は不明瞭な中のそれらの状態を意味する(三七〇八番)。

＊7　悪鬼と呼ばれる者が、だれでどんなものか、〔悪〕霊と呼ばれる者が、だれでどんなものか(九四七、五〇三五、五九七七、八五九三、八六二二、八六二五番)。

ところが東です。彼らに天界の太陽があるところが西です。彼らに南は右に、北は左にあります。彼らが身体をどこに向けてもこのことは変わりませんし、他の方向へ向けることもできません、その理由は、彼らの内的なものの方向が、ここから決定されたすべての方向が、そこへ傾き、向かうからです――来世でのすべての者の内的な方向とそこからの実際の方向決定が愛にしたがっています(**一四三**番参照)。地獄にいる者の愛は自己愛と世俗愛であり、これらの愛は世の太陽と地球の月によって意味されるものです(**一二二**番参照)。そしてまたそれらの愛は主への愛と隣人に対する愛に対立します。[*8] ここから、主から後ろ向きになり、それらの暗やみに向かうことになるのです。さらにまた、地獄にいる者は自分自身の方位にしたがって住みます。

自己愛からの悪の中にいる者は東から西にかけて住み、悪の虚偽の中にいる者は南から北にかけて住みます――しかし、このことについては地獄についてのところでさらに多くのことを述べます。

一五二　善い霊たちの間に、ある悪い霊が来る時、善い者たちがどこに自分たちの東があるのかほとんどわからないほどに、方位を混乱させられることがよくあります。何度か私はこのことに気づき、そしてまたそのことについて不平を言うのを霊たちから聞きました。

一五三　時々、天界の方位にしたがって自分の身体を向けた悪い霊が現われることがあります。その時、彼らには知性と真理の知覚がありますが、善の情愛はありません。それゆえ、自分の本来の方位へ向きを変えて振り向くと、すぐさま知性と真理の知覚が少しもなくなります。その時、彼らは「われわれが聞き、知覚した真理は真理ではなく虚偽である」と言い、さらに虚偽が真理であることを欲します――私はこの方向

転換について以下のことを教えられました。すなわち、悪い者のもとでも知的なものをこのように向けることができ、それでも意志を向けることはできないことです。このことが主により、それぞれの者が真理を見て、認めるようにとの目的のために配慮されています。しかし、だれも、もし善の中にいないなら、それらを受け入れません。善が真理を受け入れるものであり、悪は決して受け入れないからです――なおまたそこで真理によって矯正されることができるようにという理由のために、人間のもとでも似ています、しかしそれでも、善の中にいないかぎり、矯正されません。ここから、人間は同様に主へ向かうことができます、しかし、生活に関して悪の中にいるなら、直ちに向きを変えて振り向き、〔それまでに〕理解し、見た真理に反する自分自身の悪の虚偽を自分自身のもとに確認します。このことは彼らのもとで彼ら自身の内的なものから考えるとき生じます。

---

*8　自己愛と世俗愛の中にいる者は、主から後ろ向きに向きを変える(一〇一三〇、一〇一八九、一〇四二〇、一〇七〇二番)。主への愛と隣人に対する仁愛は天界をつくる。また自己愛と世俗愛は、正反対のものであるので、地獄をつくる(二〇四一、三六一〇、四二二五、四七七六、六二一〇、七三六六、七三六九、七四九〇、八二三二、八六七八、一〇四五五　一〇七四一～一〇七四五番)。

17　天界の天使の状態の変化

一五四　天使の状態の変化によって、愛と信仰に関して、ここから知恵と知性に関して、そのように彼らの生活(いのち)の状態に関して、彼らの変化が意味されます。

状態は生活(いのち)について、また生活(いのち)に属すものについて言われます。天使の生活は、愛と信仰の生活であるので、ここから知恵と知性の生活であり、それゆえ、状態はそれらについて言われ、愛と信仰の状態、知恵と知性の状態と呼ばれます。

これらの状態が天使のもとでどのように変化するか、このことを今から述べます。

一五五　天使は、愛に関して常に似た状態の中にいるのではありません、したがって知恵に関しても似た状態の中にいるのではありません、なぜなら、彼らにすべての知恵は愛から存在し、愛にしたがっているからです。ある時は、強烈な愛の状態の中に、またある時は、強烈でない愛の状態の中にいます。その状態は最大のものから最小のものまで段階的に減少します。愛の最大の段階の中にいる時、彼らは自分の生活の光と熱の中に、すなわち、その明るさと快さの中にいます。けれども、最小の段階の中にいる時、彼らは自分の生活の陰と寒さの中に、すなわちその暗さと不快さの中にいます――彼らの生活は最後の状態から再び最初へ戻り、こうしてさらに繰り返します――これらの交替は、変化とともに次から次へと続きます。

これらの状態は、光と陰、熱と寒さの変化の状態のように、または世で、一年間の絶え間のない変化ともに、日々の朝・昼・夕・夜のように続きます――さらにまた、朝は明るさの中にある彼らの愛の状態に対応し、

昼は明るさの中にある彼らの知恵の状態に、夕は暗さの中にある彼らの知恵の状態に、夜は愛と知恵のない状態に対応します――しかし、天界にいる者の生活の状態には、夜に対応するものはなく、朝の前である夜明けに対応するものがあることを知らなくてはなりません。夜に対応するものは地獄にいる者にあります。[*1]

それらの対応から、みことばの中で「日」と「年」は全般的な生活の状態を意味し、「熱」と「光」は愛と知恵、「朝」は愛の最初と最高の段階、「昼」は光の中にある知恵、「夕」は陰の中にある知恵、「夜明け」は朝に先行する暗い状態、「夜」は愛と知恵を剥奪された状態を意味します。[*2]

一五六　天使の愛と知恵に属す内なるものとともに、彼らの外にあって彼らの目の前に見えるいろいろな物事の状態もまた変化します。なぜなら、彼らの外にあるものは、彼らの内にあるものにしたがって定まるからです――しかし、特にそれらが何であるか、またどんなものか、あとの「天界の中で表象するものと外観」

＊1　天界に夜に対応する状態はなく、朝の前の夜明けに対応する状態がある(六一一〇番)。
「夜明け」は、最後と最初の間の中間の状態を意味する(一〇一三四番)。

＊2　照らしと知覚に関して天界での交替の状態は、世での一日の時間のようである(五六七二、五九六二、六一一〇、八四二六、九二一三、一〇六〇五番)。
みことばの中で「日」と「年」は、全般的なすべての状態を意味する(二三、四八七、四八八、四九三、八九三、二七八八、三四六二、四八五〇、一〇六五六番)。
「朝」は新しい状態や愛の状態の始まりを意味する(七二一八、八四二六、八四二七、一〇一一四、一〇一三四番)。
「夕」は光と愛の消えてゆく状態を意味する(一〇一三四、一〇一三五番)。
「夜」は愛と信仰の何もない状態を意味する(二二一、七〇九、二三五三、六〇〇〇、六一一〇、七八七〇、七九四七番)。

の章で述べます。

一五七　それぞれの天使は、そしてまたそれぞれの社会もまた全般的にこのような状態の変化を経験し、通過します。それでも、そこではあるものは他のものと比べて異なっています。その理由は愛と知恵が異なるからです、というのは、真ん中にいる者は周囲から辺境にかけている者よりもさらに完全な状態の中にいるからです（前の**四三**、**一二八**番参照）――しかし、その相違を述べることは冗長（じょうちょう）です。なぜなら、自分の愛と信仰がどんなものかにしたがってだれもが変化を受けるからです。

ここから、ある者が自分の暗さと不快さの中にいるとき他の者が自分の明るさと快さの中にいることが生じます。このことは同じ社会の間で同時に、またある社会と他の社会の間では異なって生じます。そして天的な王国の社会に比べて霊的な王国の社会の中でも異なります。

彼らの全般的な、状態の変化の相違は、地球上の風土帯の異なる土地でのいろいろな日々の状態のようです。なぜなら、そこでは他の者が夕方のとき朝である者がいるし、他の者が寒さの中にいるとき暑さの中にいる者もいて、その逆でもあるからです。

一五八　私は、なぜこのような変化の状態があるのか、天界から教えられました。天使は、多くの理由があると言いました――

第一の理由は、主からのものである愛と知恵から成り立つ自分たちの生活と天界の快さは、もし絶えずその中にいたなら、変化のない歓喜と楽しさの中にいる者に生じるように、徐々に価値がなくなってくることです。

第二の理由は、自分たちに人間と等しくプロプリウム（固有のもの）があり、それは自分自身を愛することであって、天界の中のすべての者は自分のプロプリウムを抑えられており、主によりそれを抑えられれば抑えられるほど、それだけ愛と知恵の中にいます、しかし、抑えられないかぎり、自己愛の中にいて、それぞれの者は自分のプロプリウムを愛するので、それを引き寄せ[*3]、このことによって自分たちに状態の変化または連続的な交替があることです。

第三の理由は、このように主の愛の中に保たれ、自己愛を抑えられることに慣れることで、こうして自分たちが完成され、そしてまた快さと不快さの交替によって、善の知覚と感覚がさらに敏感になることです[*4]。

天使たちは付け加えて、「太陽としての主は常に熱と光をもって、すなわち、愛と知恵をもって流入されるので、主が私たちの状態の変化を生み出すのではなく、私たちが自分自身のプロプリウムを愛するので、常に原因そのものはそのプロプリウムに連れ去られることの中にあります」と言いました。

このことを世の太陽と比べて、一年や一日の暑さと寒さ、光と陰の状態の変化の原因は、太陽は動かない

＊3　人間のプロプリウム（固有のもの）は自分自身を愛することである（六九四、七三一、四三一七、五六六〇番）。プロプリウムは、主が現存することができるために、分離されなくてはならない（一〇二三、一〇四四番）。実際にまた、だれかが主からの善の中に保たれるとき、分離される（九三三四～九五三六、九四四七、九四五二～九四五四、九九三八番）。

＊4　天使は永久に完成される（四八〇三、六六四八番）。天界では、一つの状態がもう一つの状態と完全に似ていることは決してなく、ここから絶え間のない完成がある（一〇二〇〇番）。

で静止しているので、太陽の中になく、その原因は地球にあることによって説明しました。

一五九　太陽としての主が天的な王国の天使に、彼らの第一の状態の中でどのように、第二の状態の中でどのように、第三の状態の中でどのように見られるか、私に示されました。

最初、太陽としての主は、赤くきらめいて、描くことができないような光輝の中に見られました。「太陽としての主は、第一の状態の中の天使にこのように見られます」と言われました――その後、太陽の周囲にさらに暗くするかさ(暈)が見られ、それによって最初の赤くきらめいたものは、その赤くきらめくものによって太陽はそれほどに輝いたのですが、弱くなり始めました。「第二の状態の中で、太陽は彼らにこのように見られます」と言われました――続いて、さらに暗くするかさ(暈)が見られ、ここから太陽はさらに赤さを減らし、それが徐々に行なわれて、ついには白く輝くようになったのが見られました。「第三の状態で、太陽は彼らにこのように見られます」と言われました――この後、その白く輝くものが天界の月に向かって左へ進み、その月に光を増し加え、そのことからその時、月は過度に輝き出すのが見られました――「これが、天的な王国の中の者にとって第四の状態であり、霊的な王国の者にとって最初の状態であって、両方の王国の中の状態の変化はこのように交替します」と言われました。しかし、王国全体の中で同時にではなく、ある社会の中で交替した後に他の社会の中で交替します。さらに、これらの交替は定まったものではなく、遅いにしろ早いにしろ、彼らが知らないうちに起こるものです。

さらに天使は、「太陽はそれ自体ではこのように動かず、このように進行もしません。しかしそれでも、自分たちのもとの継続的な進行の状態にしたがって、このように見られます。主はそれぞれの者にその状態

の性質にしたがって見られるので、強い愛の中にいるときは自分たちにこのような赤さで、愛が去るときには赤さが減り、ついには白い輝きとなり――自分たちの状態の性質が暗いかさ(暈)によって表象されたとき、炎と光に関して太陽にそれらの変化の外観をひき起したのです」と言いました。

一六〇　天使が最後の状態にいる時、それはその者自身のプロプリウムの中にいる時ですが、悲しくなり始めます。

私は彼らがその状態にいたときに話し、その悲しみを見ました。しかし、彼らは、「やがて最初の状態に戻される希望の中に、こうしてあたかも再び天界に戻されるかのような希望の中にいます」と言いました。なぜなら、天界は彼らのプロプリウムによって押しとどめられていたからです。

一六一　地獄の中にもまた状態の変化がありますが、しかし、それらについては、あとで地獄についてのところで述べます。

18　天界の時間

一六二　天界でも世のように、すべてのものは続き、進行しますが、それでも、天使に時間と空間の概念や観念はありません、時間と空間が何であるか何も知らないほどにも、まったく知りません。

ここでは天界での時間について述べ、空間については別の章で述べます。

一六三　天使は何が時間か知りません、とはいえ、彼らのもとですべてのものは世のように、まったく何も相違がないように連続的に進行します。その理由は、天界に年や日はありませんが、状態の変化があるからです。年や日のあるところに時間があり、状態の変化があるところに状態があります。

一六四　世には時間が存在しますが、それはそこの太陽が外見上では一つの段階から他の段階へ連続的に進行して年と呼ばれる時間をつくり、それに加えて、地球の周囲を移動して日と呼ばれる時間をつくるからです。その年と日は定まった交替によっています。

天界の太陽は異なっていて、連続的な進行と公転によって年と日をつくることはありませんが、外見上、状態の変化をつくり、これらの変化は前章で示されたように定まった交替によるものではありません――ここから、天使は時間について何らかの観念をもつことはできませんが、その代わりに状態についての観念をもっています。状態については前述しました(**一五四**番)。

一六五　天使は、世の人間のような時間からの観念をもたないので、それゆえ、時間についての観念も、時間に属するものについての観念ももちません――時間に固有なもの、例えば、年・月・週・日・時間・今日・明日・昨日、これらが何であるか、決して知りません。天使がそれらを人間から聞くとき(天使は主により常に人間に接合しているからです)、その時、それらに代わって状態と状態に属するようなものを知覚します――このように、人間の自然的な観念は天使のもとで霊的な観念に変えられます。

ここから、みことばの中で、時は状態を意味し、前に名称を挙げたような時間に固有なものは、それらに対応する霊的なものを意味します。[*1]

---

*1　みことばの中の時間は状態を意味する(二七八八、二八三七、三二五四、三三五六、四八一四、四九〇一、四九一六、七二一八、八〇七〇、一〇一三三、一〇六〇五番)。
天使は時間と空間の観念なしに考える(三四〇四番)。その理由(一二七四、一三八二、三三五六、四八八二、四九〇一、六一一〇、七二一八、七三八一番)。
みことばの中の「年」は何を〔意味するか〕(四八七、四八八、四九三、八九三、二九〇六、七八二八、一〇二〇九番)。
「月」は何を(三八一四番)。
「週」は何を(二〇四四、三八四五番)。
「日」は何を(二三、四八七、四八八、六一一〇、七二四〇、八四二六、九二一三、一〇一三二、一〇六〇五番)。
「今日」は何を(二八三八、三九九八、四三〇四、六一六五、六九八四、九九三九)番。
「明日」は何を(三九九八、一〇四九七番)。
「昨日」は何を(六九八三、七一一四、七一四〇番)。

一六六　時間から存在するようになるすべてものも同様です――それらは、春・夏・秋・冬と呼ばれる一年の四つの期間、朝・昼・夕・夜と呼ばれる一日の四つの期間、幼児期・青年期・壮年期・老人期と呼ばれる人間の四つの時期、その他、時間から存在するようになるかまたは時間にしたがって続くものです――人間は、それらについて考えるとき、時間から考えます。けれども、天使は状態から考えます。それゆえ、人間のもとに時間から存在するそれらのものは、天使のもとでは状態の観念に変わります。春と朝は、天使のもとで、第一の状態の中にあるような愛と知恵の状態の観念に変わり、夏と昼は、第二の状態の中にあるような愛と知恵の観念に、秋と夕は、第三の中にあるような状態に、冬と夜は、地獄の中にあるような状態の観念に変わります――ここから、それらの時間によって、みことばの中で同様のものが意味されています(前の**一五五**番参照)。

ここから、人間の思考の中にある自然的なものが、人間のもとにいる天使たちのもとでどのように霊的なものになるか明らかです。

一六七　天使は時間の概念を何らもたないので、それで、永遠について、地上の人間とは異なる観念をもっています。天使は、永遠によって、無限の時間ではなく、無限の状態を知覚します。*2

かつて私は永遠について考え、時間の観念を通して**永遠に**とは何であるかを、すなわち、終わりのないことを知覚することができました。しかし**永遠から**とは何か、このように神が創造以前に永遠から成し遂げられた、とは何のことか知覚することができませんでした――ここから不安になったとき、私は永遠について天界のスフェアの中に、こうして天使のものである知覚の中へ揚げられました。その時、永遠について時間

から考えてはならず、状態から考えなければならないことを照らされ、その時、**永遠から**とは何かを知覚しました。このことは私に起こったことです。

一六八　天使は、人間と話すとき、人間に固有な自然的な観念によっては決して話さないで、霊的な観念によって話します。自然的な観念のすべては、時間・空間・物質的なもの、それらに類似のものからであり、霊的な観念のすべては、天使の内と外のいろいろなものの状態とそれらの変化からのものです。しかしそれでも、霊的なものである霊的な観念が、人間のもとに流入するとき、一瞬にして、またそれ自体から、霊的なものと完全に対応している人間に固有な自然的な観念に変わります。このようになることを、天使も人間も知りません――人間のもとへの天界のすべての流入もまたこのようです。

私の思考の中へさらに近く入れられ、時間と空間からの多くのものがあった自然的なものの中へまでも入れられた天使がいました。しかし、その時、何も理解しなかったので、急に引き下がりました。引き下がった後、私はその天使が、「自分たちは暗やみの中にいた」と言い、語るのを聞きました。

[2]天使は時間についてどれほど無知であるか、経験から私に知ることが与えられました。

ある者が天界から来ました。彼は人間にあるような自然的な観念の中にもまた入れられることができるような者でした。それゆえ、私はその者と話し、後には人間と人間とのように話しました。

---

*2　人間に、永遠の観念は時間とともにある、けれども、天使に、永遠の観念は時間のないものである(一三八二、三四〇四、八三二五番)。

最初、彼は私が時間と名づけるものが何であるか知りませんでした。それで、私は、太陽が私たちの地球のまわりをどのように回転して見えるかを、また年と日をつくり、ここから四つの時期に区別され、さらにまた月と週に、そして日が二十四時間に区分けされ、これらの時間は一定に交替して繰り返され、ここから時間があることを全部教えなければなりませんでした。彼はこのことを聞いて、「このようなものを知りません、しかし、状態が何であるかは知っています」と言って驚きました。

[3]彼との会話の間に、私は「天界の中に時間がないことは世で知られています」と言いました。なぜなら、人間は、死者について、「彼は時をあとに残す、時から去った」と言い、このことによって世から去ることを意味するので、時間がないことを知っているかのように話すからです。

さらにまた私は、「ある者により、時間の起源は状態であり、そのことから、人間の中の情愛の状態に完全にしたがっていることが知られています。時間は楽しさと喜ばしさの中にいる者には短く、不快さと悲しみの中に者には長く、希望と期待の状態の中にいる者にはさまざまであることから――学者たちには、何が時間と空間か調べ、時間は自然的な人に属するものであることを知っている者もいます」と言いました。

一六九　自然的な人間は、もし時間や空間の観念、物質的な観念が取り去られるなら、自分に思考が存在しなくなると信じるかもしれません、人間のすべての思考はそれらに基づくからです[*3]――しかし、思考が時間や空間から、物質から得たものであればあるほど、思考はそれだけ限定され、閉じ込められること、またそれらから得ていなければ、それだけ心は物質的なものと世俗的なものの上に高揚されるので、それだけ限定されないで、広げられることを知らなくてはなりません。

天使はこのようなものだけから構成される観念の中に落ち込まないので、ここから天使に不可解なものと呼ばれるような知恵があります。

＊3　人間は時間の観念なしに考えることはない、天使に〔そう〕ではなく異なっている(三四〇四番)。